

特別記事

巨星落つー！世紀のコロラトゥーラ、エディタ・グルベローヴァ

文 中東生
Text Shinobu Naka

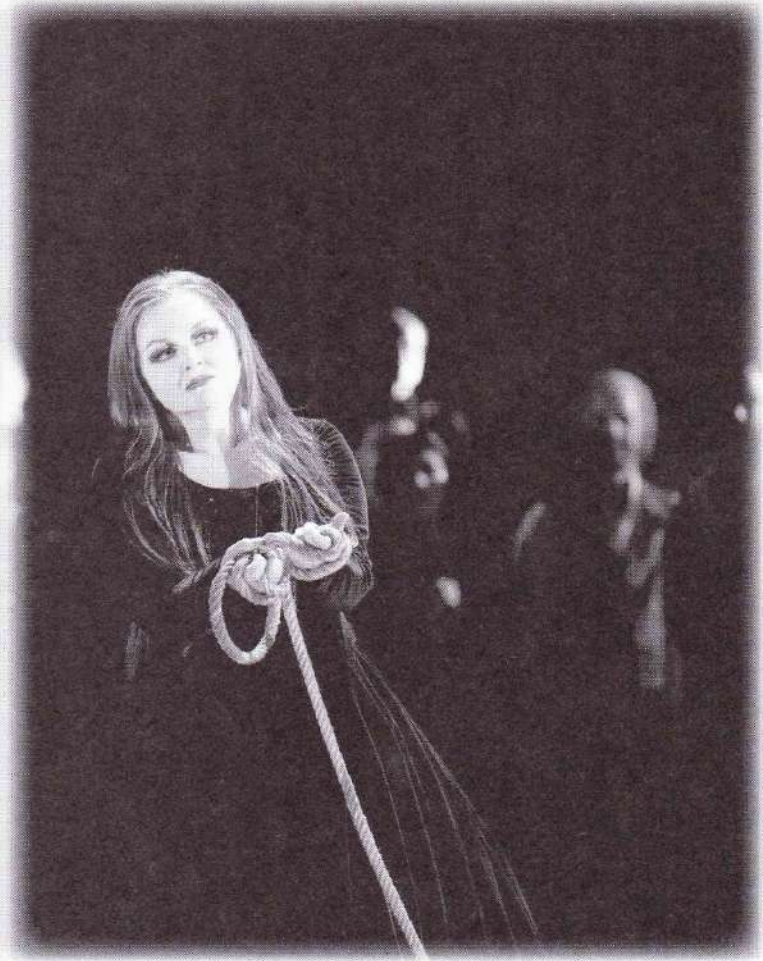
10月18日、音楽界に悲しみの波紋が広がった。50年という異例の長いキャリアを誇った「コロラトゥーラの女王」エディタ・グルベローヴァの声を、もう一度聴ける望みが完全に断たれたからだ。「神様からの贈り物」の声で超絶技巧を正確に歌うだけでなく、それを感情表現として開花させた彼女を失う心の準備は、誰にもできていなかった。今月号では、所縁の深い歌劇場総裁二人の悲しみの様子をお伝えし、来月号で彼女の一生を振り返りたい。

ウィーン国立歌劇場に800回以上出演した特別な歌手でした
ドミニク・メイエ

1970年、モーツァルト《魔笛》の夜の女王でデビューして以来、2018年の引退記念公演まで50年弱の間、宮廷歌手として愛され続けた。その歌劇場総裁を2010年から20年まで務め、現在はミ



ドミニク・メイエ
© Brescia e Amisano/Teatro alla Scala



チューリヒ歌劇場《異国の女》から © Monika Rittersaals

ラノ・スカラ座総裁であるドミニク・メイエ氏と翌19日に電話で話した。

「グルベローヴァはウィーン国立歌劇場に800回以上出演した特別な歌手でした。彼女のデビューは35分も拍手が続いたのです！そうして彼女は専属歌手となり、当時は小さな役まですべて歌ううち、1978年にカール・ベームが指揮し、グンドラ・ヤノヴィッツ、アグネス・バルツァらと共に演じたツェルビネッタ（R・シユトラウス作曲《ナクソス島のアリアドネ》）で世界的にブレイクしたのです。主なレパートリーはモーツァルトやR・シユトラウス

でしたが、彼女の夢は、当時からイタリアのベルカント・オペラだったのです。私が初めてグルベローヴァの声を生で聴いたのも、ツェルビネッタ役でした。1980年代のパリのオペラコミック座で聴いた彼女のなみ外れた歌唱が深く印象に残っていたので、パリ国立オペラ・バステイユの柿落とし（1990年）に招待したので、2009年には、シャンゼリゼ劇場にも彼女を招きました。個人的には彼女のルチア（ドニゼッティ《ランメルモールのルチア》）がとくに心に残っていますが、ここスカラ座でもリツカルド・ムーティが指揮

In memory of Edita Gruberová, the greatest coloratura soprano ①

した《ドン・ジョヴァンニ》など、モーツァルトも長く歌っていました。ウィーンでニコラウス・アーノンクールと録音したモーツァルトのCDシリーズもすばらしいです。私がウィーン歌劇場総裁となったあとは、《ルクレティア・ボルジア》（ドニゼッティ）やエリーナ・ガランチャと共演した《ホルマ》（ベツリーニ）でも大成功を収めています。2012年には日本でも《アナ・ボレーナ》（ドニゼッティ）を披露しましたね。ウィーン国立歌劇場での最後のオペラ出演も同役で2015年でした。当歌劇場デビュー45周年記念リサイタルでは拍手が50分間も続いたのですよ！そして彼女の引退コンサートも当歌劇場で2018年に行い、ツェルビネッタの衣裳を贈りました。グルベローヴァがディーヴァなのは劇場の出口までで、ふだんはいたって人間的で、大道真などスタッフ全員に温かく接する、良心的な女性でした……」

デビュー50周年を祝うガラコンサートが最後の公演となりました——アンドレアス・ホモキ

ウィーンでのツェルビネッタの成功は世界中の歌劇場への扉を開いた。終の住処となったチューリヒにも同年同役でデビューしている。しかし10年ほど出演しなかった時期がある。ダンサーとして舞台上に乗っ

ていた次女が公演中の事故に遭った際の、補償に対する劇場側の心ない態度が原因といわれている。しかし、新体制に変わり、彼女の最後の初役となったベッリーニ《異国の女》のアライデがチューリヒで実現された。その経緯などの思い出を、アンドレアス・ホモキ総裁が語ってくれた。

「グルペローヴァは1978年のデビュー以来40年間、17の役で約200回出演した、当歌劇場にとって、なくてはならない存在でした。私が初めて生で聴いたの



アンドレアス・ホモキ
© Daniel auf der Mauer mit footer

は1996年、バイエルン州立歌劇場での《アンナ・ボレーナ》(ドニゼッティ)で、その超絶技巧に込められた感情表現に圧倒

されました。初めて個人的に話をしたのは2009年ごろのベルリンでした。当時すでに次期チューリヒ歌劇場総裁の契約を得ていたので、「あのグルペローヴァがチューリヒに住んでいるが、歌劇場との問題でしばらく出演していない」と聞き、ベルリン州立歌劇場へ会いに行つたのです。私の母もハンガリー人なので、母方の親類に似ているグルペローヴァとハンガリー語で話しました！そのとき彼女が提案してきた《異国の女》(ベッリーニ)

を総裁就任後の2013年に新演出にかけ、世界のプリマドンナが当歌劇場に戻つて来たのです。その後(ロベルト・デウエリユー)《ドニゼッティ》の再演も実現し、2018年2月18日のデビュー50周年を祝うガラコンサートが最後の公演となりました。現在稽古中の《アンナ・ボレーナ》新演出を彼女に捧げます。でも本当は初日の劇場に観に来てほしかった。彼女の率直で、気取らない性格と独特のユーモアがしのばれます」(次号に続く)

